

でんご通信 第百四十七号 令和八年七月

坐禅会

七月二十九日(水) 十時より開催します。
みなさんのご参加お待ちしております。

お盆のおまいり(棚経)について

今年もお盆のおまいりで各お家へお伺いします。
お伺いする各お家にはお伝えしていますが、都合悪いお家は、調整しますのでお早めにご連絡ください。

本来無一物

先日、縁あつて四日市市上海老町の公会所へ伺いました。すると、その和室に、禅語である

「本来無一物」の額が掲げられていました。
ほんらいむいちもつ

この「本来無一物」とは、達磨大師から六番目に当たる祖師、六祖慧能(えのう) 大師が述べられた言葉です。

禅宗の始祖は菩提達磨大師(だるまだいし) と言われています。

仏教はお釈迦さまに始まり、師匠から弟子に「法を継ぐ」ことで、代々教えをつないできました。

ちなみに達磨大師はお釈迦さまから数えて二十八代目とされています。

そして、達磨大師が中国に渡ったことで禅宗がおり、達磨大師から弟子に、またその弟子にと、脈々と法が継がれて現在の日本の禅に至っています。

その達磨大師から数えて五代目に法を継いだ師匠である五祖弘忍大師(ぐにんだいし) が、ある時、六代目に法を継ぐべき者を選ぶため、道場内の弟子たちに広く悟りの境涯(きょうがい) 悟りとはなにか) を詩にして表すように募ったそうです。たぐさんの修行僧のなかで、一番弟子で後継者とされていた神秀(じんしゅう) という修行僧は、次のような詩を示しました。

身は是れ菩提樹

(身体はすばらしい悟りの樹)

心は明鏡台の如し

(心は透明な鏡のようなもの)。

時時に勤めて払拭して

(何時もせっせと磨いて)

塵埃をして染めしむる莫れ

(埃で汚さないようにせよ)

たぐさんの修行僧たちは、さすが我らが兄弟子である神秀さまだ、と感動されたそうです。しかし、この詩を見た、まだ行者(あんじゃ)・剃髪得度しないお寺の小間使い)である慧能(えのう) は、次のように詩を提出しました。

菩提もと樹なし

(悟りなどというものはない)

明鏡亦た台に非ず

(明鏡などという立派なものもない)

本来無一物

(もともと何もありません)

何れの処にか塵埃有らん

(どこに塵や埃のたまるところがあるのか)

神秀は煩惱の塵を払って悟りを求めるような坐禅修行

に励めと、インド以来からある禅定(心を集中させ、乱れることなく真理を深く観察する仏教の修行・境地)の目的です。そこにはどうしても習うとか学ぶということが中心になります。

ところが慧能は、そういう伝統的な禅定思想に対して、革命的な「智慧」思想を打ち出しました

インド禅から中国禅への独立でした。

この「本来無一物」はまさに一番弟子の神秀に対し身分も低い慧能が否定した内容の詩を掲げたことから道場内は大混乱となりました。慧能への批判と、真実の境地は慧能が優るといふ意見もあつて侃侃諤諤(かんかんがくがく)の騒ぎとなりましたが、結局、師匠の五祖弘忍大師は慧能に六祖としての伝法衣(でんぽうえ)うえ…後継者と認める衣)を授けました。ここに慧能が禅宗六祖の地位を得ることとなったのですが、快く思わない弟子たちには慧能の命を狙うものもいたようです。やがて、神秀は北宗禅、慧能は南宗禅として、禅の法脈が分かれるきっかけとなりました。この「本来無一物」は禅宗史に伝わる因縁の語であります。

さて、この書を書かれた人は、元四日市市長、加藤寛嗣氏でした。どうして政治家である市長が、この世の万物はすべて「空」であり、執着すべきものは何もないという意味の禅の言葉を書かれたのか?

加藤氏は、東京帝国大学卒業後、三菱油化に就職し、四日市市議会議員、助役、そして市長へ立候補し5期二十年在任されました。禅とかかわりは調べてもわかりませんでした。もしかしたら市長時代に、人間の欲望の空しさから公会所の墨蹟に揮毫(きごう)筆で文字を書くこと)したのかもしれない。